

## 刊行にあたって

大学医学部を卒業して、医師として初めて勤務する病院で学ぶことは新鮮で、その最初の経験がその医師の診療スタイルを将来に渡って決定づけるとよくいわれている。患者さんとの接し方、同僚医師や先輩医師との付き合い方、看護師をはじめ医療スタッフとの協調性を学ぶことから始まり、医療内容の理解、手技の修得など研修期間には学ぶことが山ほどある。この過程は研修医にとって困難ではあるが、一人前の医師として成長していく喜びでもある。

本書「外科研修チェックノート」の“総論”では、外科研修を始めるにあたっての心がまえやカンファランスへの取り組み、外科基本手技、術前・術後管理などがわかりやすく、コンパクトに書かれている。また、近年、社会環境の変化などに伴い、医師と患者との関係が大きく変貌し、患者・家族への情報公開と説明責任が強調されている。その意味でインフォームド・コンセント（説明と同意）を得るにあたっては、患者さんの疾患名、予後、治療法の比較、手術の内容、術後の経過、合併症の発生率など、患者さんが納得するまで時間をかけての説明と同意が必要とされている。十分準備した手術に際しても、医療行為の不確実性のため、予想外の疾患の進展、想定外の合併症の発生に見舞われることがある。このようなインシデント・アクシデントに対して、“隠さない、逃げない、ごまかさない”の姿勢で対応し、その原因を究明し、再発防止につながる仲間同志の検討（peer review）を重ね、病院全体の安全レベル・医療レベルを上げていく努力が必要とされている。本書では、このような医師の基本姿勢が的確に記述され、一読に価する。

2004年より卒後臨床研修の2年間に、内科、外科、救急、麻酔科、小児科、産科、精神科、地域医療と幅広い研修を行い、患者さんを全人的に、総合的に診られるよう基礎修練が組まれ

ている。その目的とは裏腹に各々の研修期間が短かく、小間切れにならざるをえないところもある。しかし、学生時代のBSL (BST)とは異なり、この研修期間では患者さんの受け持ち医となり、診察し、診断し、治療計画を立て、手術に参加したり、麻酔をかけたり実地の医療行為を行なわざるをえない。それ故、知識は具体性と確実性が要求され、診療にあたっては常にその応用が試される。本書の“各論”では、自治医科大学附属さいたま医療センターの一般・消化器外科、整形外科、心臓血管外科、呼吸器外科で日常的に遭遇する疾患について、実際に行われている医療内容が具体的にコンパクトにまとめられている。また、疾患の概念、診断、治療法、術後管理法が要領よく説明され、図表や写真入りでわかりやすい。

研修中には白衣のポケットに入れ、迷ったときにはすぐ取り出し、診療の参考にしていただければ幸甚である。

2007年12月吉日

自治医科大学附属さいたま医療センター  
副センター長  
井野 隆史